St. Luke's International University Repository

Evaluation of Curriculum 2015 by the Graduate Class of 2019: a Comparison with Evaluation of Curriculum 2011 by the Graduate Class of 2018

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-03-19 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 林, 直子, 小野, 若菜子, 小山田, 恭子, 松本, 文奈, 加藤木, 真史, 永瀬, 能央, Hayashi, Naoko, Ono, Wakanako, Oyamada, Kyoko, Matsumoto, Fumina, Katogi, Masashi, Nagase, Yoshihisa メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.34414/00000121

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

短　報

カリキュラム2015評価報告
―カリキュラム2011最終年度卒業生との比較から―

林　直子[1)]　小野若菜子[1)]　小山田恭子[1)]　松本　文奈[1)]　加藤木真史[1)]　永瀬　能央[2)]

Evaluation of Curriculum 2015 by the Graduate Class of 2019: a Comparison with Evaluation of Curriculum 2011 by the Graduate Class of 2018

Naoko HAYASHI[1)]　Wakanako ONO[1)]　Kyoko OYAMADA[1)]
Ayana MATSUMOTO[1)]　Masashi KATOGI[1)]　Yoshihisa NAGASE[2)]

〔Abstract〕
The new curriculum (curriculum 2015) conducted at the Faculty of Nursing in 2015 has been revised for the purpose of strengthening clinical practice ability, internationality and bachelor's ability. To review the level of revised curriculum effectiveness, the curriculum evaluation working group has conducted a web survey on curriculum 2015 as a graduation questionnaire for faculty undergraduates and 3rd year transfer graduates. The responses were obtained from 113 out of 119 graduates (95% response rate). The level of achievement of the diploma policy and the nursing practice ability were higher than the previous year. On the other hand, in terms of bachelor's ability, quantitative skills were increased compared to the previous year, but other abilities were only slightly increased. As for internationality, participants in the study abroad programs decreased. Therefore, people with oversea experience decreased accordingly. For the next curriculum revision, further enhancement of bachelor and international skills and the development of nurses who can respond to changes in social affair and health problems are required.

〔Key words〕 Nursing, Undergraduate, Curriculum evaluation, Web survey

〔要　旨〕
2015年度より本学看護学部で開始した新カリキュラム（カリキュラム2015）は，臨床実践能力，国際性，学士力の強化を目的として改訂された。そこでカリキュラム評価ワーキンググループでは，卒業時アンケートとして学部ならびに学士３年次編入課程卒業生を対象に，カリキュラム2015に対する web 調査を実施した。全卒業生119名のうち113名から回答を得た（回答率95％）。カリキュラム2011最終年度卒業生の結果と比較したところ，ディプロマポリシーの達成度，看護実践能力について，達成度，修得状況はいずれの項目も前年度に比べ高かった。一方学士力については，数量的スキルは前年度に比べ上昇したが，その他の能力については微増にとどまっていた。国際性については，留学プログラムの参加者は減少し，渡航経験も減少していた。次回カリキュラム改定に向けて，学士力ならびに国際性の一層の強化と，社会情勢，健康問題の変化に即応できる看護師の育成が求められる。

〔キーワーズ〕 看護，基礎教育，カリキュラム評価，web 調査

1）聖路加国際大学大学院看護学研究科・St. Luke's International University, Graduate School of Nursing Science
2）聖路加国際大学大学事務部・St. Luke's International University, Academic and Student Administration

受付　2019年10月21日　　受理　2019年11月23日

Ⅰ．はじめに

聖路加国際大学では，2015年度より看護学部において新カリキュラムを開始している。本学は開学以来数度にわたるカリキュラム改訂を行ってきたが，一貫して「看護学を専門としその領域において指導者となる人材を育成する」という教育目標を掲げ，看護基礎教育を行ってきた。カリキュラム2015（2015－2019年度）では，カリキュラムポリシー，ディプロマポリシーに則り，①臨床に強い看護専門職の育成，②国際的な視野を持つ看護専門職の育成，③学士にふさわしい教養人の育成強化，の３点をより一層強化することを目途に，カリキュラム改訂を行った。具体的な改定内容として，①臨床実習科目の増設，②国際奨学金の対象拡大と海外実習の増設，③教養科目に総合科目を増設し，スペイン語，フランス語，文化人類学等を開設した。また，2017年度より，学士編入課程として２年間で修了する学士３年次編入コースを開設した。

そこでカリキュラム評価ワーキンググループ（以下，評価 WG）では，カリキュラム2015に対する教員，学生の評価を把握し，今後予定されているカリキュラム2020の効果的な展開に向けた提言を行うことを目的に，2018年度卒業生と教員を対象にカリキュラム評価アンケートを実施した。本稿では，学生対象の調査結果について，カリキュラム2011の最終年度卒業生（2017年度卒業生）のアンケート結果との比較を加えて報告する。

Ⅱ．調査方法

１．対象者

2018年度学部卒業生91名ならびに学士３年次編入（学士編入生）第一回卒業生28名，合計119名を対象とした。

２．調査期間

2019年３月１日～３月８日

３．調査方法と質問内容

１）調査方法

Google フォームを用いた web 調査を実施した。

２）質問内容

2017年度に実施した卒業時カリキュラムアンケートでは，2018年度卒業生との比較を勘案し，2016年度以前の調査項目であるカリキュラムの順序性，満足度，ディプロマポリシー達成度を問う項目に加え，「卒業時の実践能力を測る項目」５群20項目[1]と，「卒業時の学士力を測る項目」３群12項目[2]，「卒業時の国際性」に関する６項目を加えた合計61項目で調査を行った。

2018年度は「卒業時の実践能力」については日本看護系大学協議会による「看護学士課程教育におけるコアコンピテンシーと卒業時到達目標」（平成30年）[3]に基づき再構成した６群25項目と，新設科目（８科目）の選択状況と満足度と理由の24項目を追加，さらに学士編入生には科目の順序性，カリキュラムの過密さ，学部生との交流状況，学習環境の４項目と自由記述４項目を追加した質問項目を作成した。合計質問項目は学部生100項目，学士編入生108項目であった。

４．分析方法

学習環境等に対する満足度は「満足」から「不満足」までの５段階，ディプロマポリシー達成度は「十分に達成した」から「達成していない」の５段階，学士力は「十分に高まった」から「変化なし」の４段階，実践能力は「十分に獲得した」から「獲得していない」の５段階で評価を求め，各回答を記述統計でまとめた。また自由記述については項目ごとに内容を分析し類似する内容ごと回答を類型化した。

Ⅲ．結　果

１．対象特性と回収率

2018年度調査は，学部生89名，学士編入生24名，合計113名から回答を得た（回答率95％）。2017年度調査は卒業生96名中80名から回答を得た（回答率83.3％）。

２．看護学部カリキュラム全般ならびに学習環境に関する評価

カリキュラム全般ならびに学習環境に対する満足度は，2018年度は前年度と比較してすべての項目において，「満足」「やや満足」と回答した者の割合が増加していた。特にコンピュータルーム（89.4％），実習科目（87.6％），専門科目（86.7％），図書館（85.0％），卒業研究（84.1％），基礎科目・アーツルーム（看護実技演習室）（83.2％）は「満足」「やや満足」の割合が80％以上であった。「満足」「やや満足」の割合が低かった項目は，課外活動（53.1％），教養科目（55.8％），行事・健康管理関係（60.2％）であった。2017年度と比較し満足度が大きく上昇したのは，アーツルーム（＋28.2％），健康管理関係（＋14.6％），図書館（＋13.7％），コンピュータールーム（＋13.1％）であった。

学習サポートについて，2018年度は前年度に比べ全体的に満足度が上昇していた（**図１**）。

３．ディプロマポリシーの達成度に対する自己評価

「１．人間愛，共感」「２．人間形成，自律性」「３．学問探求，批判的思考力」「４．系統的看護実践，知識技術態度」について，2017年，2018年の傾向は変わらず，「十

分に達成した」「ほぼ達成した」を合わせて90％を超えていた。特に「十分に達成した」とした者は，2017年に比べ2018年は約２割から４割へと倍増していた。

「５．リーダーシップ」「６．国内外の看護の役割と医療システムでの責務」についても，2017年，2018年で傾向は変わらず「十分に達成した」「ほぼ達成した」を合わせ約70％，「十分に達成した」は10～20％に留まってい

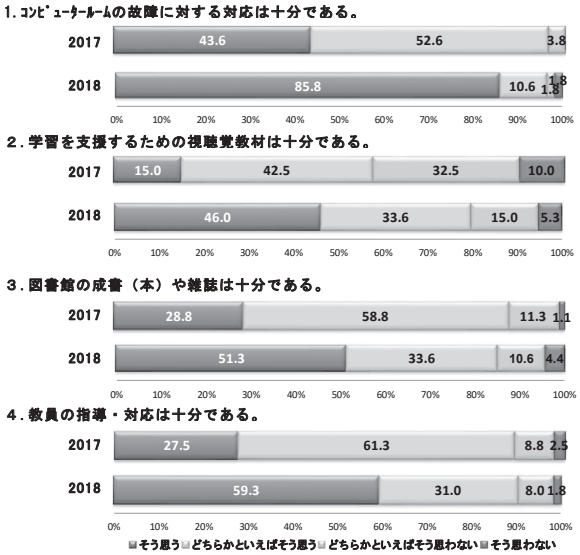

図１　学習サポートに対する評価

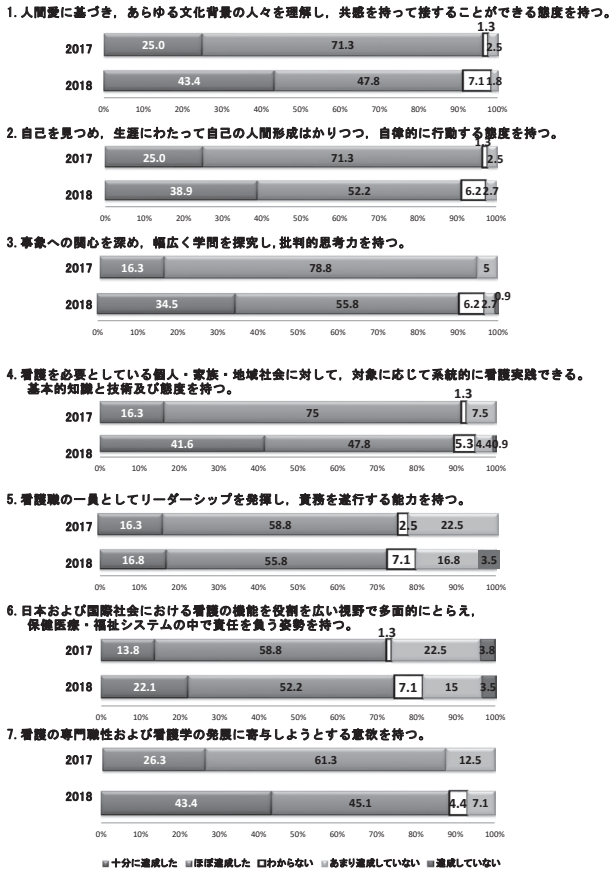

図２　ディプロマポリシーの達成度評価

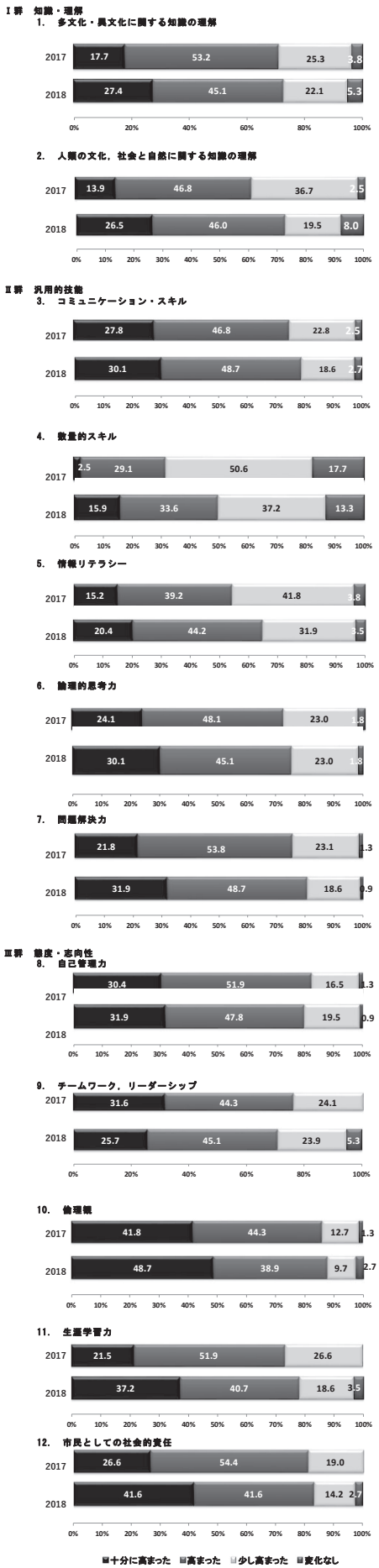

図３　卒業時の学士力に対する評価

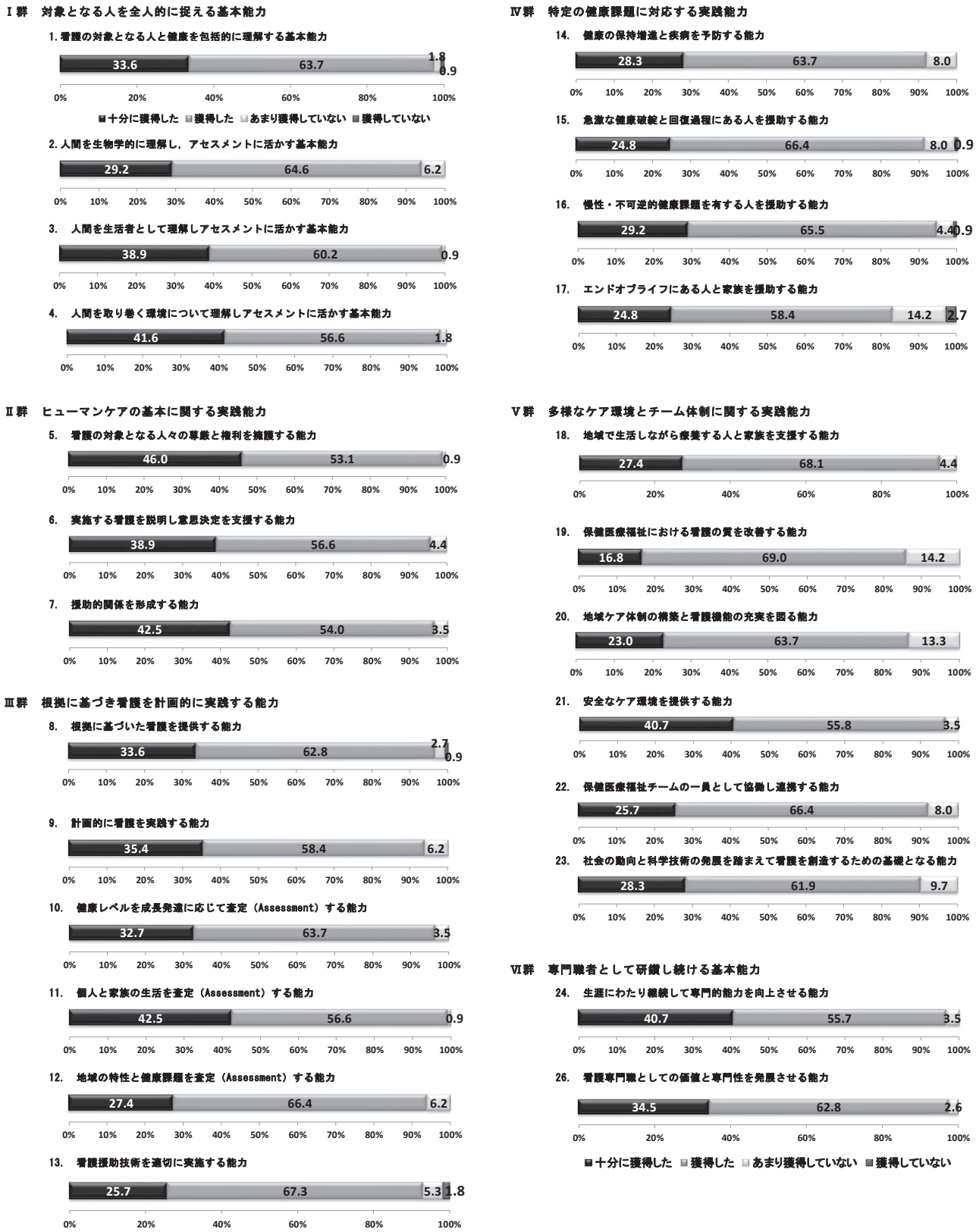

図４　卒業時の実践力に対する評価

※図中の帯グラフ上の数値は，有効回答数の合計に対する割合（単位：％）を示している。
※設問ごとのｎ数は，2017年度は78≦ｎ≦80，2018年度はn=113である。

た。「７．看護学発展への意欲」についても2017年，2018年ともに「十分に達成した」「ほぼ達成した」を合わせて約90％であった（図２）。

４．卒業時の学士力に対する自己評価

「知識・理解」「汎用性技能」「態度・志向性」の殆どの項目において，70％程度の学生が「十分に高まった」「高まった」と回答しており，前年より微増した。前年に比べ「十分に高まった」「高まった」と回答した学生の割合が最も増加したのは「汎用性技能」の「数量的スキル」で，31.6％から49.5％に上昇していた（図３）。

５．卒業時の実践能力に対する自己評価

2018年度は2017年度の質問項目に対して，新規に５項目（no.１，２，３，４，18）を追加し，８項目については表現を一部修正した（no.６，16，17，19，20，22，23，24）。追加した５項目すべてにおいて，ほぼ100％の学生が「十分に獲得した」「獲得した」と回答した。その他の全ての項目においても，「十分に獲得した」と回答した学生が，前年より多かった（図４）。

６．卒業時の国際性に関する自己評価

2017年と比較して，学内の留学プログラムへの参加回数は減少し，０回と回答した割合は54％から71％に増加した。その他の渡航経験も75％から38％に減少した。一方，在学中に語学力が向上したかについては「はい」という回答が2017年の31％から45％に増加した。

７．カリキュラム2015新設科目に対する評価

新設の８科目のうち履修者のいなかった課題探求実習，フランス語を除く６科目について履修状況と履修理由，満足度について記す。

１）サービスラーニング

サービスラーニングは，地域社会における健康・福祉領域のボランティア活動に参加し学習する科目である。履修者は35名（31％），履修理由は「必修科目だと説明された（認識した）」「ボランティアの経験をしたかった」「単位が必要だった」という理由が大半を占めた。履修しなかった理由は「編入の科目になかった」「時間的に厳しかった」「知らなかった」「興味がなかった」等であった。履修者の60％が「満足，やや満足」と回答し，その理由は，「良い経験ができた」「多くの人と交流できた」等であった。不満足の理由としては，「履修の意義が不明確」「教員のフィードバックや評価基準がばらついていた」等が挙げられた。

２）卒業実習チームチャレンジ

卒業実習チームチャレンジは，４年次後期に，新人看護師が行う看護実践に近い状況での実習を病院等で行う科目である。履修者は８名（7.1％），履修理由は「入職前に実習ができる」「不安があった」等が多かった。未履修の理由は「国試対策をしたかった」が大半で「時期が悪い」「希望の領域がなかった」等も挙げられた。履修した８名中７名が「満足，やや満足」１名が「どちらでもない」と回答した。満足の理由は「看護師として働くイメージが持てた」「足りないことが自覚できた」などであった。「どちらでもない」の理由は，「選択する科によっては実習目標達成が困難で，目標設定に戸惑った」というものであった。

３）スペイン語

スペイン語の履修者は７名，履修理由は「興味があった」が多く，満足度は「やや満足」が６名，「どちらでもない」が１人であった。やや満足の理由は「わかりやすかった」「丁寧な授業だった」等であった。履修しなかった理由は「他に取りたい科目があった」「余裕がなかった」「興味がなかった」「学士の科目になかった」などであった。

４）総合実習（イリノイ大学派遣留学）

履修者は４名，履修理由は「アメリカの看護を学びたかった」「２か月も行ける機会はなかなかない」「興味があった」としていた。満足度は「満足，やや満足」が３名，「どちらでもない」が１名であった。「どちらでもない」の理由は，「英語力の高くない海外の学生が多かった」であった。未履修者の理由は「語学力が不足していた」「他に履修したいものがあった」「興味がなかった」というものが多かった。

５）文化人類学

履修者は５名，理由は「興味があったため」が多かった。満足度は「満足，やや満足」が４名，「どちらでもない」が１名であった。理由は「やや満足」と回答した１名が「知らない世界を教えてもらえたが，地域が限定されすぎていた」としていた。未履修の理由は「興味がなかった」「３年次編入で科目がなかった」が多かった。

６）総合科目

総合科目では，専門職業人としての教養を高めるために，様々な分野の講師による授業が行われている。履修者は４名，履修理由の記入はなく，満足度は１名が「やや満足」であった。未履修の理由は「時間がなかった」「興味がなかった」「存在を知らなかった」が多かった。

８．学士編入生カリキュラムに関する調査

学士編入生28名中24名が回答した（回答率86％）。

１）カリキュラム・科目の順序性について

カリキュラム・科目の順序性について適切だったかと尋ねたところ，「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と回答した者が18名（75.0％），その理由として「科目の順序性に問題はない」「座学のあとにすぐ実習がありよ

かった」「各期で特定の領域の学習に集中できた」等が挙げられた。

２）カリキュラム（授業スケジュール）の過密さについて

カリキュラムの過密さが適切だったかと尋ねたところ，「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と回答した者が12名（50.0％），その理由として「過密ではあるが２年間なので仕方がない」「予想よりも時間に余裕があった」「サポート体制が整っていた」等が挙げられた。「そう思わない」「どちらかといえばそう思わない」と回答した者（50.0％）は，その理由として「忙しい時期が集中していた（編入１年目が過密で２年目後期はゆとりがある）」「休暇は短くてもよいのでゆとりのあるスケジュールが良い」等を挙げた。

３）学部生との交流の機会について

学部生との交流機会の適切性について，「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と回答した者が13名（54.2％），その理由として，学部生の意見は新鮮で面白かった，等が挙げられた。「そう思わない」「どちらかといえばそう思わない」と回答した者（45.8％）は，「交流する機会がほとんどなかった」「もう少し交流する機会があってもよかった」「グループワークで学士１人はやりにくい」「学部生と温度差がある」等を理由に挙げた。

４）学習環境（講義室，演習室）について

学習環境の適切性について，「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と回答した者が13名（54.2％），その理由として特に不便を感じなかった，環境が整っていた，等が挙げられた。「そう思わない」「どちらかといえばそう思わない」と回答した者（45.8％）は，その理由に，「講義室Ｂ（学士編入生の講義室）が狭かった」「講義室Ｂはグループワークがしにくい」「プロジェクターやマイクの調節で授業時間が減ることがあった」等を挙げていた。

Ⅳ．考　察

学習環境とサポート体制に対する満足度は前年度同様に高く，特にアーツルームの満足度が大きく上昇していた。アーツルームにおいては，学生数の増加と利用状況から2018年度に新たに実習室を一室設けたこと，学生の実技演習，自己学習への取り組み意識や態度の変化もその要因であることが推察された。今後アーツルームの利用状況と，評価との関係性の検討も必要だと考える。

ディプロマポリシーの達成状況について，いずれの項目も前年度に比して「達成した」との認識が上昇していたことから，カリキュラム改訂により，卒業時の学生の認識が，本学の目指す修了生像により近づいていることが推察された。看護実践能力についても，前年度に比べ実践能力に対する自己評価が高い結果となっていた。これより，本カリキュラム改訂により，目的とした実践能力の強化について，学生の自己評価からは有効だったと考えられる。一方学士力については，数量的スキルは大きく上昇したものの，他は微増に留まっていた。変化を即時に実感する能力ではないことから，教育効果を測るには卒後の長期的な変化を追うことも必要である。国際性については，前年に比べ語学力は「向上した」との認識が高まっていたが，留学プログラムへの参加や渡航経験はむしろ減少していた。特に，学士編入生のカリキュラムにおいては，時間的に留学が難しい影響も一因と考える。

Ⅴ．結　語

カリキュラム2015が目指した，臨床実践能力，学士力，国際性の強化について，学生の自己評価からは一定の効果が認められたと考えられる。今後一層の学士力，国際性の強化を図ること，さらに諸外国に先んじて超高齢社会を迎えた本邦の地域包括ケアシステムが，将来の世界モデルになる可能性をも視野に入れ，様々な地域・社会で他業種・職種との連携の力を持った看護職の育成を目指すこと，そのためにも主体的学習を促進するゆとりある学習時間設定と科目の統合が，次なるカリキュラム改訂への示唆と言えるだろう。

引用文献

１）文部科学省．平成22年度 先導的大学革新推進委託事業「看護系大学におけるモデル・コア・カリキュラム導入に関する調査研究」報告書１［Internet］. http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/itaku/1307331.htm［参照 2019-10-17］

２）文部科学省．学士課程教育の構築に向けて（答申）（平成20年12月24日中央教育審議会）［Internet］. http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/__icsFiles/afieldfile/2008/12/26/1217067_001.pdf ［参照 2019-10-17］

３）一般社団法人日本看護系大学協議会．看護学士課程教育におけるコアコンピテンシーと卒業時到達目標（平成30年６月）［Internet］. http://www.janpu.or.jp/file/corecompetency.pdf ［参照 2019-10-17］